

## 愛しの「ネコ本」

平野 信輔

拙著、「これなら通じる 技術英語 ライティングの基本」が、ようやく世に出ました。最初に企画があつてから、10年近く経っているのではないかと思います。なんとといっても、筆者の筆が遅いのです。書き出すまでに時間がかかる性格なのは、去年のエッセイに書いたとおり。話が出ては消え、盛り上がってはすぼみ、いつの間にか時間が経ってしまいました。ですが、遅れがもたらすのは、悪いことばかりではありません。ひよっとしたらこれは必要な時間だったかも、と思えることも多いのです。(負け惜しみとも言い訳とも聞こえるでしょうが。)

「今度こそちゃんと書きましよう」と、本格的に企画が立ち上がったのはおよそ2年前。工業英語協会の事務局からゴーサインをもらい、工業英検文部科学大臣奨励賞の表彰式の場で、編集さんと最初の打ち合わせをしました。それが金曜日。週明けの月曜日、行きつけのバイク屋の裏の駐車場で、猫を捕獲。後にトラジローと名付けられる、キジトラ猫です。トラジローと本書は、時を同じくして筆者の生活に大きく関わり始め、それが自然と本の体裁に影響を与えていったのです。

先生と生徒の掛け合いで話を進めていく形は、もともと構想していました。編集さんも「平野先生の講義をまさに受けているようなライブ感を大事にしたい」ということでしたし、自分でもその形式ならアイデアをまとめやすいと思いました。心配だったのは、活字にしてしまうと生徒にキツイことを言い過ぎる印象になりはしないか、ということです。そこで、トラジローを登場させ、生徒を小馬鹿にした物言いを任せることにしたのです。ネコなら、かなりキツイことを言わせても雰囲気は悪くなりませんし、いざとなれば生徒と喧嘩させたっていい。実際、寸劇も続々と頭に浮かんできました(ほとんどはボツとなりましたが)。編集会議でもこのアイデアは即採用され、以降、本書はコードネームを「ネコ本」として企画が進行することになります。トラジローを飼い始める



前であれば、このようなアイデアがスムーズに出ることはなかったでしょう。

「ライブ感を大事にする」というコンセプトのもと、本書の半分以上は、私が編集さん相手に模擬講義をし、それを書き起こしてもらって制作しました（遅筆対策でもありましたね）。講義内容は企業研修の定番部分でしたが、それもここ数年の間に改善されていました。疑問が湧きやすいような説明や、流れが悪くなりやすい箇所は、年月が経つうちに多くはすでに淘汰されていたのです。やはり、煮詰まったものをまとめる方が、効率は良いです。それでもこれだけ時間がかかったのですから、もしも数年早い段階で書き出していたら、より大変な作業になっていたであろうことは想像に難くありません。

この改善力を私に与えてくれたのが、OSTECでの経験です。10年も経てば、講師だってそれなりに成長し、知識の整理や修正が進みます。例えば、何かを説明した時、受講者の顔にクエスチョンマークが浮かんでいれば、その説明の何かを変えなければいけません。説明に対する受講者の反応が、講師を育てるのです。逆に言えば、オーディエンスが無反応だと講師は成長しません。世界で一番その心配がないのが、OSTECという研究会でしょう。月に一度、質の高い受講者と接する機会を長年にわたって与えてくれているOSTECには、いくら感謝しても、し足りません。

最初の一冊でもあるし、OSTECでの経験を活かした解説を駆使し、飼い猫まで登場させてもらったのだから、愛着もひとしおです。慣れない中、やっとの思いで仕上げただけに、いろいろ不具合はあるかもしれませんが、それでも、何かしら「読んで得した」と思ってもらえるように、心がけたつもりです。OSTECのみなさんには、いかにも平野っぽい本だと笑って読んでいただき、キャラクター達を可愛がっていただければ、うれしいです。

ちなみにリアル・トラジローはなかなか素直な性格で、本のトラジローのように嫌味なところはございません。ネコの名誉のために付け加えておきます。